

連合北海道
2017年度 第2回政策委員会 政策学習会講演録

日時／2017年5月25日

場所／ホテルポールスター札幌

テーマ 介護しながら働き続けられる社会へ
男性介護を考える～高齢社会における男女共同参画～

講師 北海道男性介護者と支援者のつどい 事務局長 小番 一弘 氏



【プロフィール】 ■小番 一弘 (こつがい かずひろ)

1959(S 34)年 札幌市生まれ 57歳

秋田県立秋田高校 慶応大学法学部法律学科卒

■東京にてサラリーマン、自営業を経て、49歳の時に母と叔母の介護のため単身札幌へ戻り、介護と仕事の両立、男性介護問題、高齢者の住まいの問題に取り組む。

朝日新聞朝刊「向老学」連載 2014年6月～2015年9月

<http://www.asahi.com/area/hokkaido/articles/list0100111.html>

■FM白石 毎週火曜日 介護相談レギュラー出演

その他テレビ、新聞、雑誌など多数取材を受けており、講演、セミナー、イベントなどゲスト出演実績多数

■介護職員基礎研修終了

○NPO法人 札幌高齢者住まいのサポートセンター 代表理事

○一般社団法人 シニアライフサポート協会 代表理事

○北海道高齢者向け住宅連絡協議会 第1期理事

○札幌市男女共同参画第5期委員

○北海道男性介護者と支援者のつどい 代表

○札幌認知症の人と家族の会会員

○シーズネット会員

まず、自己紹介させていただきます。所属している団体は一般社団法人シニアライフサポート協会、NPO法人札幌高齢者住まいのサポートセンターの代表理事をさせてもらっています。

私がなぜ男性介護のことに関わっているかという、私は49歳の時に東京にいましたが、父と母は札幌で二人で暮らしていました。母が70歳の時、いま86歳なので16年前にアルツハイマー型の認知症を発症してしまいました。父がマンションの自宅で母の介護をしていましたが、認知症は少しずつ進行していく病気ですので、だんだん父もまいてきまして、私が長男でもありましたし、いずれ札幌に戻る予定でしたが、予定より早く戻らざるを得ない状況になってしまい、戻ってきました。



ただ、私は介護、福祉のことはまったくわかりません。正直、戻ってきて母を前にして、どう対応したらいいのか、どう介護したらいいのか、戸惑うばかりでした。東京にいた頃は母と電話で話していても、認知症が進行しているとは感じませんでした。父と母のそばで暮らすようになったら母の状況がいろいろわかり、父と同じように母につぶされてしまうと危機感を持ったことを今も鮮明に覚えています。

どうしたかといいますと、たまたま職安で当時、ヘルパー2級の資格が無料でとることができました。母を介護する上では認知症の知識を得なければいけないし、学ぼうと3ヵ月間勉強してもらいました。当時は受講すれば資格が得られました。実際に学校で学びましたら、介護、福祉は奥が深いなど、自分は母の認知症のことしかわからないけれど、もっと他の方の認知症の症状や介護の仕方などを学んでみたいと興味が湧きました。母の介護をずっとしては自分も鬱状態になってきますし、今まで社会で仕事を通じていろいろな方とつながりを持っていたわけですから、いきなり家に入ってしまって父と母しかつながりを持っていないとなると、当時49歳でしたのでまいてしまいます。もちろん、子どもも大学生でしたし、経済的にも働かなければならないのですが、現実問題として母をディサービスに送り出すのが9時過ぎ、その前にご飯食べさせたり着替えさせたりし、夕方には帰ってくるので迎えなければいけない。もう一つ、93歳になる母の姉は独身で、私が身元引受人として身の回りの世話を始めました。同じマンションに住んでもらい介護をしていました。二人の介護をするので、日中フルタイムで仕事することができませんでした。当時は今ほど経済状況は良くありませんでしたので50の男がどこかで働きたいと言っても雇ってくれるところはありません。「介護ヘルパー2級とりました」と言っても、今でこそ介護業界は人手不足ですが、8年前位ですと男性が介護の資格をとったからといって、ぜひ働いてくれというところは全くと言っていいくらいありませんでした。たまたま家の近くに10人ほどしか入居していない高齢者住宅がありまして、当直の仕事だったら週2~3回来てもらっていいよという募集がありました。夜9時~朝8時までなんですが、私にとってはその条件が都合良いのです。母達にご飯を食べさせ後片付けし父親にバトンタッチすれば、できなくないなど日当8500円もらい仕事を始めました。そこは介護認定3以上の認知症の方が多く住んでいました。10人分のご飯を作って朝8時に終了する。大至急家に帰って母達のディサービスへの送り出しができるので、1年間パートの仕事をさせてもらいました。今振り返ると、そ

こでの1年間の仕事が役に立ちました。

その後、別の高齢者住宅の運営を手伝ってほしいと依頼がありました。今後、自分の仕事をどうしようかと考えましたが、これから高齢者社会になる、自分も高齢者住宅を運営してみようかと考えもありました。当時、今と比べて数は少なかったのですが、小規模高齢者住宅があちらこちらにありましたので、家の近くの高齢者住宅で運営の手伝いをはじめました。入居希望者の方は入居先を探すのに苦労していました。不動産やさんに行ってみつけられるものではありません。家賃やサービス内容等、かなりミスマッチが多かったので、NPO法人札幌高齢者住まいのサポートセンターを立ち上げ、高齢者の住まいを探す人と住宅を提供したい人のマッチングをしています。住まいの相談だけするつもりでしたが、引っ越しや家の中の不要品、持ち家の処分などの相談もされました。入居に際して独身者や子どもさんがいない方、いても海外にいる方の保証人の問題、また、認知症での後見人の問題とか、遺産相続、そして葬式、お墓の問題まで、様々な相談が寄せられました。全部の相談にのることは大変ですが、お年寄りの相談ですからこれはあっちへ、それはこっちに行ってくださいではなく、ワンストップで解決することを心がけて行っています。保証人には簡単になれることではなく、当初は扱っていませんでしたが生活保護の方、家族のいない方々の支援も始めました。それから高齢者の住まいに一人で暮らしていて自分の墓をどうしようか、墓を守ってくれる人は誰もいないという方に、合同のお墓も持たせていただいています。高齢者住宅等で亡くなった方で希望があれば合同のお墓に入らせていただいています。

私は介護体験の話しかできません。どんな状況になっていたかとか、介護離職に関する話とか、皆さんのお役に立てる話をさせていただければと思います。今日の新聞にも介護離職が報道されていました。札幌市では8%位が介護離職したというデータです。今でこそ安倍政権も介護離職ゼロと言ってます。世の中の問題になってきているとわかってきましたが、私が離職した頃は誰も注目はしませんでした。ヘルパーの仕事を1年間していた時に非常に孤独を感じました。ヘルパーの職場でも働いている人は、ほとんどが女性でした。私と同じように親の介護で仕事を辞めたり、パートをしていたとしてもいずれにしても男性が親の介護、妻の介護をしている人たちはどこにいるのかと思いました。なかなか見かけないし、話を聞かないなと思いました。同じ境遇の人と情報を共有したい、話してみたいと思いました。ネットで男性介護とか検索したら、男性介護ネットワークというのがありました。京都との立命館大学の津止先生が主宰し、津止先生が男性介護問題を研究していました。男性介護ネットワークに参加させていただき、札幌で同じような境遇の人たちと情報を共有したいと申し込んだんですが、「札幌ではほとんど会員さんはいませんよ」と、ただ私と同じような境遇の人がいるだろうから中心になって輪を広げてくれないかと話があり、男性介護ネットワークに入りました。

■超高齢化社会

高齢化社会とか、超高齢化社会とかいろいろな呼び方がされていますが、厳密には高齢化率が21%を超えた世の中を超高齢化社会と呼ぶそうです。今、日本は26.7%の高齢化率になっていますので世界のトップランナーとして超高齢化社会を迎えています。ただ、自分の親の問題とかで高齢者の方と接しているかと思いますが、若い方ですと祖父母と同居しているわけでもないし、高齢化社会と言われてもピンと来ない方も多い。私たちは超高齢化社

会の現場を見てほしい、高齢者の方と接する機会をもってほしいと考え、高齢者バス見学ツアーというものを実施しています。老人ホームや、高齢者住宅に行きます。暮らしている方々の様子がうかがい知ることができますので、すぐに誰かが入居する、自分が入居するというわけではなくても、ぜひ参加してみてください。

■男性は「介護される」立場ではない。男性も介護する時代へ

今となっては当たり前の話ですが、私も講演する際には男女共同参画とか主宰する講演に呼ばれる機会が多いです。昔であれば男性は介護しない、外で仕事することで、じゃー誰が介護するんだとなったら、長男のお嫁さんがという時代がありました。しかし、今は女性も働く時代になりましたし、長男が、次男がと言っている時代でもありません。男性も介護するのは当たり前という時代になっています。今更、男性と介護は特殊な目で見るとは必要はありません。100万人以上の男性も介護に携わっているデータもあるそうです。

昔なら二世帯とか三世帯で暮らしていて家族みんなで老人を支えていくという時代で、おじいちゃんおばあちゃんは楽隠居していた。家も食事も困ることはありませんでした。ところが世帯構成も変わり、今は65歳以上の世帯の3割以上が一人暮らしというデータもあります。それから老老介護の老夫婦だけの世帯も3割以上、この二つをあわせると6割を超えています。介護という話になった時に、一人暮らしの人が多くて、ゴミ屋敷になっていたり、孤立死という社会問題化しています。もう一つ、最近、世帯のことで思うのは独身の子どもと親と一緒にいる世帯が増えてきています。結婚しない子どもさんが増えています。私は20代半ばで結婚しましたが、当時、私と同じ年代で生涯未婚率は3%いるかないかでした。私が結婚した時は50歳になっても結婚しない人なんているの、いるとしたらよっぽど変人じゃないかというのが社会的通年だったと思うのですが、それが今では20%を超えています。今は、50歳になっても独身ですと言ったところで珍しいことではありません。その方々は、以外と親と暮らしています。今の80歳代、90歳代のように全員が正社員で働き、年金がもらえるという時代なら経済的に困りませんが、就職氷河期に社会人になられた方々は正社員で働いていない方がいます。そういう方は親の年金も頼りに暮らしている方もいます。相談事例でも母親と息子さんと暮らしている、母親が弱ってきて、預貯金もあるし年金もあるのでそろそろ有料老人ホームに入ろうかなという相談を受けました。ケアマネさんも、家で息子さんが何か世話をするわけでもないし、預貯金もあるし、必ずしも息子さんと家にいる必要もないから、入りたいというなら入ってはいかがですかと高齢者住宅を探しました。ところが最終的に保証人も必要ですから息子さんに保証人をお願いしたら、息子さんは親と別れて暮らす気はない、親と家で暮らすんだというわけです。息子さんは経済的なことを心配している、施設に入れば当然、お金はかかります。息子さんは経済的に自立できないので親を離したくないというケースが最近増えています。男性介護の話からそれますが、男性であれ女性であれ、結婚して戻ってきた娘さんや、お孫さんがいたら母子家庭で経済的に厳しいとなると親の年金を少しあてにして暮らすというケースが多いので紹介しました。

■男性介護者による虐待、無理心中、介護殺人という現実

残念ながら新聞にも時々報道されます。どうしても男性の方が多いです。一番目は息子で

す。次に夫、娘となつてきます。報道されるのは表面的なものしか出てきません。一見、ひどい息子だなあと終わってしまうことがあります、現実的には一生懸命介護した人間ほど行き詰まって、最後、そのような事に至るといふのが多いそうです。親を大事にしていなかったら介護もしないでしょうし、ほったらかしていると思います。一生懸命介護している人ほど行き詰まってしまふ。そして、社会資源を使って地域を含めてサポートがあれば行き詰まらないかもしれませんが、行き詰まっているケースはほとんど自分だけ頑張ってしまう。

■なぜ男性介護者は行き詰まるのか。男性ならではの介護の苦勞と困難

男性介護を語る時に、男性の特性を理解しなければなりません。女性だって一生懸命介護して大変なはず。行き詰まってしまう理由はなんなんだろうか、お隣同士、話してみてください。(3分程度話し合い)

まだ話足りないかもしれませんが、どんな意見が出されましたか。男性介護者が行き詰まる理由として、男性ならでわのこんなことがあるのではないか、どんなご意見が出されましたか。

(会場から発言あり：仕事との両立に難しさがあるのでは。職場での話し相手はいても、介護となると話し相手がなくて行き詰まってしまうのではないか。介護も含めて完璧にやろうと思ってしまう行き詰まるのではないか)

その通りだと思います。私たちは男性介護者のつどいを開いていますが、体験を聞くと一番の理由だと思うのは、私もそうでしたが3ヵ月間、ヘルパーの資格を取りに行きまして勉強した、母親の介護は完璧だ、どんな認知症でも対応できるぞ、ぐらいに思って勉強したことを家に持ち帰るんですが、ほとんど教科書通りにはいきません。なぜうまくいかない、おかし、そんなはずはないという壁にぶち当たりました。男性というのは仕事は完璧にやるべきだ、自分にはこれはできないとか無理とか、お願いしますとか言ったらまわりに迷惑がかかるから、できる限り自分が頑張るんだという意識で仕事を続けてきたと思います。ところが介護に関しては、その理屈がなかなか通らない、そして男性にはプライドがありますから、できないから誰かに相談する、隣のおばちゃんに相談できるかという自分のプライドが許さないとか、惨めだったらしいとかという思いがあるんです。私も最初の頃は相談相手もないし、隣近所もわかりませんし、同じマンションの人にも言いたくなかったです。ある時、エレベータの中で、母のことをよく知っている方が「久しぶりだね」声をかけてきました。「認知症になってね」と答えると、「大変だね」とか同情の言葉をかけていただくのですが、その言葉が私にとってはとても惨めだったらしいことになってしまった。なるべく近所の方とも顔を合わせたくないし、母の今の状況を見せたくないと思いました。プライドは簡単には捨てられないけど、女性だったら隣近所の人とか友達に、「母のことでこんなことあって…、あんなことあって…」と話すことが多いと思いますが、話すことでストレスが解消されたり、友達からアドバイスを受けていますが、男性はポイントだけしか話しません。皆さんが介護をする立場になった時、仕事をされてたら職場でいろいろなストレスを抱えながら忙しく仕事をされて、かつ家に帰ったら介護が待っています。食事の支度もしなければいけない、掃除、洗濯をしなければいけないとなると、怒鳴らなくてもいいのに怒鳴ってしまうなど気持ちが荒れてしまうかもしれない。うちの母も同じ事を5分おきに何度も何度も言

っていました。最初は丁寧に対応しても繰り返されると言葉が荒れてきます。最後は何も返事をしなくなります。自分では虐待と思っていませんが、無視という一つの虐待ですね。男性介護のつどいに来られた方も、90歳の母を介護している、母子家庭で育て、母さんのおかげで今があるから母さんの面倒は看たいと、だけど時々母さんを叩くと言っていました。叩くことはいいことではないけど、「自分だけではない」、「話をしたらすっきりした」と言っていました。なぜ叩くのですかと聞くと、わからなかったら子どもだっておしりを叩いて躡けてきたと、自分の母親も失禁してはいけないところで失禁してしまうことがあるので、叩くんだと言っていました。ある意味、介護の知識が無いと叩くことで直るのではないかと思っている方もいるのではないかと思います。認知症の人の特徴などがわからないと勘違いもあつたりします。

掃除、洗濯、ご飯支度をすれと言われても70歳代、80歳代の方は「男子厨房に入るべからず」、「外で一生懸命仕事をするのが男性」で、家を守るのが奥さんの仕事でとやってきた年代です。今の70歳代、80歳代の方で、奥さんを介護している方はできないことをやることでストレスになっている。うちの父の場合は食事の支度は苦にならなりません、ある旦那さんはスーパーに買い物に行くことすら苦痛だと、そんなことやったことないって方もいます。洗濯機もいろいろな機能があつて、70歳代、80歳代の方はできません。

私の父親が一番困ったのは、ディサービスに行くのに着替えさせて、お迎えが来たら送り出すのですが、上はどれを着せて下は何をはかせたらいいのかわからない。男性だと自分の服を着るのに、そんなに困らないかもしれませんが、女性の洋服を着せてみてくださいと言われたら、けっこう難しいものがあります。口紅ぐらい塗ってあげられたらいいと思います。それがすらもできない。それから物を隠されてしまう。ちょっと目を離すうちに、いろんなところをいじって、いろんなところに入れてしまう。ホットプレートで焼き肉でもしようかと思つたら、コードが見当たらない。何日か後でとんでもないところから出てきました。また、みんなでドライブに行つて、車のキーをテーブルの上に置いてコーヒーを飲んでたら、キーがなくなつてしまいました。母に聞いても知らないと言うので、もしかしたら草むらをはいている時に落としてしまったのかと途方に暮れていたら、母がおもむろにポケットからキーを出したんです。今となつては笑い話ですが、怒つても仕方ないけど怒りたくもなることもありました。

徘徊も、する人もいるし、しない人もいます。物をどこかにしまう人もいるし、しない人もいます。幻視も症状が出る人もいれば出ない人もいます。一口に認知症と言っても症状が違いますし、アルツハイマー型と言っても全員同じではありませんし、進行のスピードも違います。癌と同じです。薬も適応能力は様々です。

うちの母は徘徊で10回以上、警察のお世話になっています。毎回見つかっているからいいんですが、見つからないまま行方不明になっている方もいっぱいいます。どこかで行き倒れになっている場合もあります。冬の朝に出て行って、探しても見つからず、昼になって雪の中から見つかったということもあります。母も雪が降っている中、ちょっと目を離した時にスリッパで風呂桶を持って出て行ってしまいました。日中だったらドライバーさん等が保護してくれるのですが、夜だったし雪が降っていたし、裏道だったので誰にも目撃されませんでした。2~300m先で見つけられたから良かったのですが、気付くのが遅かったら、雪の中で行き倒れになってたかもしれません。徘徊は怖いものがあります。中から鍵をかけて出られないようにしてましたが、父が出入りしたちよつとのすきに出て行かれたりするこ

ともありました。認知症が初期の時、新橋の蒸気機関車のところで父と母がはぐれてしまい、父が交番に駆け込んで身なりを告げたら、

警察官：「その人、今来ましたよ」

父：「認知症なんだから保護してくれないと」

警察官：「ぜんぜんそんなふうに見えませんでした」

父：「それで、どうしました？」

警察官：「なかのしまってどこにあるかと聞かれたので、神奈川にあるなかのしまの行き方を教えました」

うちの母は豊平区の中の島に住んでたので、その当時はまだ自分の住所は言えますから、そう言っちゃった。幸いにしてお金持たせていなかったの切符を買えなかったの大事には至りませんでした。それから山手線目黒駅で降りたら母親がいなくなってた。父と一緒に降りないで電車に乗ったままではないかと、各駅に連絡してもらいました。「保護された」と連絡が入ってきませんでした。電車に乗ったまま一周して、たぶんこの電車じゃないかと乗って探しましたが見つからない。東京の大都会に出て行ってしまったら見つけれないなと思ったのですが、二周目来て、母が一人で電車から降りてきたんです。頭のどこかに目黒という駅名が残っていたんだと思います。小樽市朝里のホテルで母とランチを食べていてトイレに行きたいと言うので行かせたら戻ってきません。ホテル内を探しましたが、どこにもいない。ホテルから出てしまったかと思い、車で探しても見つからず警察に電話したら、小樽の街中で見つかりました。タクシーに乗るお金もないし、どうやって小樽の街中まで行ったのか。実はホテルの送迎バスに乗ってたんですよ。

認知症の人ってどういう症状が出るのか、現実にどのようなことが起こるのか知っておいた方が役立つことがあるかもしれませんので紹介しました。他にもいろいろな症状があると思います。時間があるようでしたら「男性介護を語ろう居酒屋」へ。場所は会議室で居酒屋さんではありません。男性はお酒が入らないと本音は言いませんよね。日中といっても介護していたら集まれませんし、本音が出てきません。けどお酒が入るとポロッと「実はね…」と本音が出てきたりしますので、生の声が聞きたいという方はぜひ参加してください。

■男性介護者がぜひ知っておきたい10項目

自分が介護をしなければならなくなった立場と、自分じゃないけど職場や親族に男性介護者がいるとかに知っておいたらいいのではないかというものですが、私がこれまで話したことです。

つまり、食事を作るのも困る、着替えも困る、徘徊されても困る、困ることがいっぱいあります。そういうことが起きても病気が人がなせる技で、認知症は病気が人が行っていることだから怒ってもしようがないわけで、それを受け止めて、どう対応するのかということになります。特に最近、高齢者が高速道路を逆走したり、通行人を轢いたりとか加害者になってしまう。車を運転して木にぶつかってという話ではないので、本人はもとより家族も困ります。裁判になって認知症だったら起訴されない、被害者の立場になれば、とんでもないことです。最近、免許返納が理由で地方にいる父母を札幌の高齢者住宅に入れたいという相談がありました。免許を返納して身動きがとれなくなったので札幌に呼ぶんです。今までは免許返納を理由とした入居はありませんでした。子どもたちからすると、事故を起こ

されたら怖いですね。高齢者もまだまだ大丈夫だとはいえ、どこかで返納しなければいけないという思いが出ているのかもしれない。

■介護にともなうトラブル

いろんな情報を皆さんが知って、自分の親にあらかじめそのことを伝えるにはどう伝えたらいいとか、自分たちから言うと伝えづらいことがいっぱいあります。言い方を間違えるとけんかになっちゃいます。

介護にともなうトラブルは、兄弟、親子、親族、地域の人も含めて、ゴミ捨ての問題とかで地域の人とトラブルになっている場合もあります。「ものとられ病」になっちゃって、近所の人が入ってきたとか言い出して、近所の人からも「お父さん最近おかしいんだよね」と子どもさんに連絡が入ることがあります。

それから、札幌に住んでいる子どもさんが地方の親の様子を見に毎月行ってますと、体力的にも負担が大きいものがあります。娘が近くで介護している、息子は東京の会社に勤めている場合、仲のいい兄弟でも親をどうするんだ、相続をどうするんだという話になって、全部娘さんにまかせるといういいお兄さんもいるが、お兄さんの嫁が「半分もらえる権利あるんだから、馬鹿なこと言わないで。うちだって子どもの教育費にいっぱいかかるのよ」と、もめるケースがけっこうあります。

私が今、一番困っているのは、母親がエンディングノートとか書いていません。母は介護認定5で、流動食を食べていますから、いずれ誤嚥性肺炎とか起こして胃瘻にしませんかと医者から提案された際に、どうするのか本人は意思表示できない、エンディングノートにも何も書かれていないから、父か私が相談しなければなりません。父と私は胃瘻はしなくていいのではないかと話していますが、離れた兄弟とも話していませんから、いざとなった時に来て、「医者が胃瘻しようと言ってるのに胃瘻しないってどういうことよ」ともめる可能性もあります。今までの相談でも兄弟でもめているケースがあります。胃瘻してもしなくても後悔します。苦しい選択をしなければいけません。少しでも後悔しないように、医者、看護師、宗教家等を招いて勉強会等で学んだりしています。

■生涯あんしんを目指して

認知症になっても安心して暮らせる社会をつくるのが理想です。育児に男性もかかわることは社会的にも認められてきました。それと同様にケアに関しても、「ケアメン」を目指そう、介護を暗く考えても仕方ないので、どうせ関わらなければならないのなら、もっと明るくケアに取り組んでいこうと目指しています。

皆さんの職場でも介護で悩んでいる方がいるかもしれません。介護離職すべきか、避けるべきか、介護と仕事の両立と助け合いには職場の理解が必要です。法整備も必要でしょう。介護休暇のとり方も以前よりとりやすくなっています。そして地域での助け合いの仕組みがないと成り立ちません。

皆さんは職場で今は表だってはいませんが、介護のことで悩んでいる仲間がいるのか、いたとして会社としてどのような対応をすべきなのか、同僚としての対応、会社が頑張っても会社だけでは解決しない家族や地域とのことをどう解決したらいいのか等、今、わからないことを抱えている方も多いかと思います。何か聞きたいことがありましたら相談受けたりし

ながら住みよい世の中にしていけたらと思います。札幌は生活保護が大阪に次いで二番目に多い街です。道内各地から高齢者が札幌に来ています。高齢化率は今後、相当上がっていくと思います。生活保護予備軍の収入の低い40歳代、50歳代の方が多くいますから、社会保障費が多くかかる可能性があります。出生率が札幌市は東京よりも低いと聞いています。今後、高齢者が増えるだけではなく、少子化、多死時代になりかねません。私も今、親の介護のことでいっぱいになっていますが、本当の心配は孫たちの時代です。自分のことも心配ですが、20年後、30年後の社会が一番心配です。今は男性も女性もありませんから、社会で、職場で協力し合って「介護大戦争」に勝つためにどうしたらいいのか一緒に考えていきたいと思っています。

【会場からの質問】

出席者：地方に住んでいた父が20年前に亡くなったが、亡くなる半年くらい前に認知症になり、札幌に連れてくると医者に話したら、「生活圏を変えると認知症が進んでしまう、あなたがこちらに来なさい」と言われました。簡単に転勤できないなど考えているうちに亡くなりました。今、妻の両親が地方にいますが、いずれは同様の事態になるかもしれません。生活圏を変えない方がいいのか、変えてでも先に札幌に呼んだ方がいいのか教えていただきたい。

講師：結論から言うと一長一短があります。地方に住み続けるという選択も一つあります。その良さは、知っている人たちが地域にいます、長年住み慣れた家ですから勝手がわかっています。もし札幌の高齢者住宅に移ったとします。私たちは「呼び寄せ老人」と言っていますが、札幌の子どもから呼ばれて地方から移り住む、高齢者住宅に入居したと。一番最悪なのは初日、夜中に転倒した方がいました。住み慣れていない家なので夜中にトイレに起きた際に転倒してしまったのです。田舎で畑仕事も多少やっていた、いつも眺めていた海や山、川、おいしい魚や野菜を食べていたのに、高齢者住宅に入ったら食事も景色も変わったら精神的にもまいってしまいます。そう考えたら住み続けたらいいのかとなりますが、住み続けたら続けたで医療の問題、冬期の除雪の問題、買い物の問題、車もないしとなりますから、現実問題としては地方で住み続けるというのはものすごく大変なことになってきます。いつのタイミングで札幌に呼んだらいいのかとなります。早いほうが適応能力は残っています。80歳で呼ぶより60歳、70歳で呼んだ方が習いごとに行けたり、地域で新しい友達もつくることができます。経済的なこと等、早めに呼ぶことができるなら呼んだ方がいいと思います。ただ、住んでる人の思いは住んでいる人でなければわかりません。難しい問題です。子どもたちは心配して呼びたがりますが、親は頑として移りたくないという人が多いのが現状です。

以 上

言い直しや繰り返しの発言等については、事務局で整理しました。

連合北海道総合政策局